平安文学新論

――国際化時代の視点から――

平野由紀子 編

風間書房

まえがき

『平安文学新論』は十八本の論文を収める。お茶の水女子大学の学部や大学院で平安文学を学んだ研究者の論集である。そのうち七本は留学生だった人のものである。およそ和歌・物語・日記文学の順に並べ、「世界文学としての平安文学」として配した。それ以外の論文を「平安文学の深層」として前に置き、あわせて二つのグループとした。

一昨年の秋、私の停年退職を期に、平安文学の論集を編みたいという申し出を元留学生たちから受けた。常々、還暦・古希は珍しくない現在、喜寿からなら祝っていただく、と周囲の卒業生に言っていた私としては辞退したかった。しかし、熱心な説得にあううち、一つの考えが浮かんだ。

平安文学を研究する卒業生の中に、これを機会に学問的、人間的交流が生まれるのではないか。犬養廉先生と共に十年間続けた卒業生の輪読会（いさら会）の成果が『後拾遺和歌集新釈上・下』として結実したが、犬養先生亡きあと、平野ゼミの『千里集全釈』の刊行に携った若い世代には、上の世代を知らない人々もいるのだった。結婚、子育て、介護といった生活人と職業人の両面を持つ卒業生たちは、少し前を、苦闘しつつ歩む先達に、どれほど勇気付けられることか。私自身の経験に照らしてもそれは明白だった。一つの論集をつくる過程こそ、卒業生の間の得がたい結びつきの契機になる―このように考え至った時、その申し出を受けることにした。

この論集への参加を呼びかける時、今回は書けない、という人がいて当然、すなわち、幾たびかの中断を余儀なく

されるのが女性研究者なのであるから、無理をしない、次の機会に書くことでお互い了解する―これを原則とした。いずれも渾身の論文であり、これまでの見方に縛られることなく論じている。私も書くことを求められた。

発起人の方々と執筆者の交流を見て、心から満ち足りた思いである。厚く御礼申し上げる。

二〇一〇年三月

平野　由紀子

目　次

まえがき
私家集研究の現在――御堂関白集――　平野由紀子　一

平安文学の深層

延喜十四年醍醐天皇皇女の屏風――屏風歌における「古」と「今」――　野呂　綾子　二五
恵慶の位置　松本真奈美　四五
実方集丙本――道信との関わり――　河本　明子　六五
『公任集』二二五番歌に見える「女房」と高松殿明子　小柳　淳子　八七
中宮宣旨の一考察――威子・章子内親王に仕えた宣旨――　諸井　彩子　一〇七
『源氏物語』夕顔巻冒頭について――頭中将誤認説再考――　富永　直美　一二七
『源氏物語』竹河巻の研究――源氏と軒端荻・夕霧と玉鬘の物語と「露のかごと」――　原山絵美子　一四七
扇に書く――『源氏物語』の消息文に関して――　坪井　暢子　一六七
『蜻蛉日記』の石山詣でに関する一試論　長戸千恵子　一八九
『和泉式部日記』――他作の可能性について――　尾高　直子　二〇九

世界文学としての平安文学

「きぬぎぬ」の歌の二元性について　権　赫仁　二三一
閨怨詩と恋歌――表現の「型」の衝突と融合――　胡　潔　二五七
「経夫婦」と「男女の中をも和らげ」　陳　燕　二七七
平安時代の物語に見る「唐土意識」と「日本意識」　丁　莉　二九三
日本と韓国の宮廷文学と女性　金　英　三一三
道綱母の「臥し起き」「臥す」しぐさについて――待つ女から書く女へ――　施　旻　三三五
ヨーロッパにおける『更級日記』の受容と評価　カロリーナ・ネグリ　1
あとがき　三六九

ヨーロッパにおける『更級日記』の受容と評価

カロリーナ・ネグリ

私の知るかぎりにおいては、アメリカと違って今までヨーロッパでは、『更級日記』についての発表・公表された研究論文の数が非常に少なく、現在でもほとんどヨーロッパ諸言語における『更級日記』の翻訳に付け加えられただけの作品の解説だけにとどまっていると言っても過言ではない。

本稿では、まず、今までヨーロッパで読まれている『更級日記』の翻訳のリストを紹介し、筆者が『更級日記』をイタリア語に翻訳した時に、特に参考になった英語の翻訳、フランス語の翻訳、ドイツ語の翻訳を分析して、その翻訳に含まれている作品の解説の内容を考察していきたい。次に、後半では、今までイタリアで公表された研究論文、そしてイタリア語訳に関する事項、つまり翻訳の苦労や問題点、読者の反応などを中心に検討する。

1　ヨーロッパで出版された『更級日記』の翻訳

以下に年代順に、一番新しいものから一番古いものまで、ヨーロッパ諸言語における『更級日記』の翻訳を整理して、その翻訳の題名を日本語で記入した。

1) Carolina Negri, *Le Memorie della dama di Sarashina* Venezia, Marsilio, 2005

題名「更級の女官の回想」

2) Hara Junko, *Sarashina nikki*, Tokyo, Kindaibungeisha, 2000
題名「更級日記」

3) Irina V. Melnikova, *Sarashina nikki. Odinokaia luna V Sarasina*, Iaponskaya klassicheskaia biblioteka 8, Sankt-Peterburg, Giperion, 1999
題名「更級日記・更級の孤独な月」

4) Frits Vos, *Als dauw op alsembladeren. Het levensverhaal van een Japanse vrouw uit de elfde eeuw* Amsterdam, Meulenhoff, 1988
題名「葉っぱの上においてあるつゆのように。11世紀の日本における女性の人生」

5) Réné Sieffert, *Le journal de Sarashina*, Paris, P.O.F., 1978
題名「更級日記」

6) Ivan Morris, *As I Crossed a Bridge of Dreams. Recollections of a Woman in Eleventh-Century Japan*, New York, Dial Press, 1971
題名「夢の橋を渡るように。11世紀の日本における女性の回想」

7) Ulrich Kemper, *Sarashina Nikki. Tagebuch einer Japanischen Hofdame aus dem Jahre 1060*, Stuttgart, Reclam Universal Bibliothek, 1966.
題名「更級日記・1060年の日本の女官の日記」

8) Omori Annie Shepley and Kochi Doi, *Diaries of Court Ladies of Old Japan, The Sarashina Diary, The Diary of Murasaki Shikibu, The Diary of Izumi Shikibu*, Boston, Houghton Mifflin, 1920
題名「古代日本の宮廷婦人の日記」、『更級日記』、『紫式部日記』、『和泉式部日記』

9) Marc Logé, *Journaux intimes des dames de la cour du vieux* Japon. Paris, Lobrairie Plon, 1925
題名「古代日本の宮廷婦人の日記」大森安仁子・土居光知による英訳の重訳

10) Giorgia Valensin, *Diari di dame di corte nell'antico Giappone*, Torino, Einaudi, 1946
題名「古代日本の宮廷婦人の日記」大森安仁子・土居光知による英訳の重訳
『枕草子』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』

11) Y. G. Khatskevich, *Dnevniki pridvornyzh dam drevnei Iaponii*, Minskz, Kharvest, 2002
題名「古代日本の宮廷婦人の日記」 大森安仁子・土居光知による英訳の重訳

12) A. Pfizmaier, *Das Tagebuch von Sara-Sina, Wien*, 1880
題名「更級日記」

ヨーロッパでは、『更級日記』の古い英訳としてよく知られているのは、三作品『更級日記』、『紫式部日記』、『和泉式部日記』が含まれている1920年にアメリカで出版された大森安仁子氏・土居光知氏による英訳である。そして、その翻訳をもとにしている、つまり、日本語の本文からの直接翻訳ではない、ヨーロッパ言語の翻訳が幾つか出版されている。それはMarc Logé氏によるフランス語訳、Giorgia Valensin氏によるイタリア語訳、そしてY. G. Khatskevich氏によるロシア語訳である。

大森安仁子氏・土居光知氏による英訳は、ヨーロッパの読者に初めて平安時代の女流日記文学を紹介した非常に功績のある翻訳でありながら、70年代から出版されたヨーロッパ言語の翻訳と比べてみると、誤りの多い、とても古風な英語で書かれた翻訳だと考えられている。

実は、すでに1972年にEdwin A. Craston氏がIvan Morris氏による英訳の書評で、「大森安仁子氏・土居光知氏による英訳は古めかしくなったので、だれかが『紫式部日記』の全訳を完成したら、『古代日本の宮廷婦人の日記』を捨てて、忘れたほうがいいです。あるいは、せいぜい翻訳の歴史の研究する時だけそれを復活させましょう。」と述べている(1)。

また、1920年に遡るこの翻訳は、1924年に『更級日記』の御物本の綴じ誤りが発見される前に出版されたものであるから、必然的に文章が混乱して誰にも読み解けない所が多くある伝本を元にしていることも問題である。

大森安仁子氏・土居光知氏の英訳に続くものは、筆者も学生時代には読んだ1971年に初めて出版されたIvan Morris氏による『更級日記』の英訳である。まず、注目しなければならないのは、その英訳のタイトルである。訳者は物語、歌物語そして和歌集の特徴を併せもつ平安時代の日記は、英語の「diary」か「notebook」にはなかなか相当しないと考え、『The Diary of Sarashina』というタイトルを避けて、古い歌から引用した「As I Crossed a Bridge of Dreams」を選んだ。訳者がタイトルに用いた語「夢浮橋」は、『更級日記』の中にはないが、よく知られているように夢が繰り返し描かれている点、『源氏物語』の「夢浮橋」のように、人生をはかないと捉えている点からタイトルとしている。序文は訳者自身が執筆した作品の解説である。それは、『更級日記』の作者の生い立ち、当時の社会状況と人物関係、註釈史等に触れ、特に近世国学の本居宣長とその門人による、父孝標の官職をめぐる問答をとりあげて（常陸守説と上総守説）、一般には上総介とされている事を示している。また、『更級日記』の構造の中で大事な役割を果たしている菅原孝標の娘の和歌について示し、その翻訳の苦労を述べる。本文研究に関しては、玉井幸助氏の定家本の錯簡を発見した挿話を入れ、現在の本文に至った経緯等を紹介して

いる。底本は『更級日記評釈』（宮田和一郎校注、麻田書店、1931年）、日本古典文学大系『土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・更級日記』（西下経一校注、岩波書店、1964年）であるが、いずれも、定家本を底本とするものを使用している。翻訳部分は『更級日記』の本文を34段落に分け、段落の番号、題名、それに描かれていることが大体何年に起こったのかを付する。この英訳は一般読者を対象としているので、巻末には本文の注が多く、17の挿絵（それは1704年版の木版画）も使用している。また、見返しには上総から京都までの旅程を記した地図も掲載されている(2)。

Edwin Cranston氏が指摘しているように、Ivan Morris氏による『更級日記』の英訳は、大森安仁子氏・土居光知氏による英訳と違って、分かりやすくて、自然な英語の文章で書かれているが、あちらこちらで本文の部分が省略されていて、翻訳の誤りも少なくない。Ivan Morris氏自身が解説で述べているように『更級日記』を翻訳した時に、一番苦労したのは和歌の翻訳らしい。Edwin Cranston氏はIvan Morris氏による『更級日記』英訳の書評では、その和歌の翻訳の問題について10頁ぐらいを費し、詳細に検討している。ここで、一つの例として菅原孝標の娘が京への道中にくろとの浜という所に着くときに詠む歌を挙げてみたいと思う。

まどろまじ
今宵ならでは
いつか見む
くろとの浜の
秋の夜の月(3)。

Ivan Morris氏による英訳では次のようになっている。

Had I not stayed awake this night,
When should I have seen the moon
This Autumn moon that lights Kuroto Beach?(4)

この場合、打ち消しの意志を含む「まどろまじ」は、「けしてねるまい」という意味になるので、英語では「I shall not sleep at all」に翻訳するべきであるが、Ivan Morris 氏による英訳では仮定文になっていて、別の意味を表してしまうと思われる。また、本文の和歌が英訳では韻文調であまり書かれていなくて、散文調になってしまっていることも批判されている(5)。

実際に、この英訳を読んでみると、本文の和歌に関しての誤り以外に、和歌の不自然な書き方も目立つのである。4 行書きや 3 行書きなど不統一な書き方であるため、西洋の読者は本文の和歌独特の 5 行書きを味わうことができなくなってしまう。Ivan Morris 氏による序文にも、あちらこちらにおどろくような不可解な点がある。たとえば『更級日記』の文脈について「文脈はとても長過ぎて、日本語で 3、4 頁の長さで続く文脈もあります。」と注する。それは、読者には印象深い言葉ではあるが、実際に本文を読んでみると Ivan Morris 氏が述べていることが大げさであると誰でも理解できると思われる。また、『更級日記』定家の写本の錯簡に対しては、17世紀のはじめ頃に遡ると述べているが、一方、写本の錯簡を発見した玉井幸助氏は「更級日記の錯簡及び其の復旧」という研究論文では同じ点について、ただ、「いつの世にか」と判断しているのである(6)。

数年後、1978年に出版された Rene Sieffert 氏による『更級日記』のフランス語訳には20頁ぐらいの解説が加えられてあり、その解説では訳者自身が、平安時代の日記文学について述べている。日記の最初として『土佐日記』を挙げて評価する。さらに簡単にではあるが、『紫式部日記』、『更級日記』、『成尋阿闍梨母集』、『讃岐典侍日記』の成立と内容について明示する。次に『更級日記』の解説を 4 節に分け、順番に (1) 「作者とその家族」、(2)「作者の生い立ちと作品の成立」、(3)「作品の題名の原義」、(4)「本文の写本の歴史」などについて詳細に検討する。

翻訳に関しては、日本古典文学大系『土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・更級日記』（西下経一校注、岩波書店）、完訳日本の古典『更級日記』（犬養廉、小学館）を参考にしたとある。本文は全訳で、和歌は５行書きで示されている。このフランス語訳に関しては、書評がなかなか見つからないのであるが、筆者は『更級日記』をイタリア語に翻訳した時に、よくフランス語訳を参考にして、ヨーロッパ諸言語における『更級日記』の翻訳の中ではこれはたしかに日本語の本文に一番近いと思ったことがある。欠点と言えば、Rene Sieffert 氏によるフランス語訳は、日本独自の植物や文化・人物等に関する注が一つも付いていないので一般読者を対象にしていないようだ。また、巻末に用語集は掲載されていないし、日本独自の植物や平安時代の文化に関する名詞は無理やりフランス語に翻訳されたような気がしばしばする。たとえば、本文では菅原孝標の娘が京への道中で武蔵の国に入ってから、次のように読めるのである。

> 今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。浜も砂子白くなどもなく、こひじのやうにて、むらさき生ふと聞く野も、葦・荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで高く生ひ茂りて、中をわけ行くに、たけしばという寺あり(7)。

ここでは、植物の名前として「むらさき」、「葦」、「荻」が三つも現れてくるが、René Sieffert 氏によるフランス語訳では、それぞれ「croit le grémil」、「cannes」、「roseaux」と翻訳されている(8)。しかし、詳細に調べてみると、フランス語の言葉は日本独自の植物になかなか合わないので、無理やりフランス語に翻訳するよりも、そのまま日本語で残しておいて、用語集を作ってそこに植物の説明を加えればよかったと思われる。勿論、一般読者は、つまり日本の文化のことをあまり知らない人たちはその翻訳の問題が分からないかもしれないのであるが、日本の古典文学を研究している研究者には、古典文学の作品でよく描かれている植物が完全に消えてしまったような気がするに

違いない。

1966年に出版されたUlrich Kemper氏によるドイツ語訳は、訳者自身が書いた7頁ぐらいの序文がある。Kemper氏は、最初に日記の特徴として自由な書き方、それから、作者の個人的な感覚と意見を描くことを挙げる。次に、漢字を基として発生した仮名の普及によって花開いた平安時代の日記文学について述べる。そして、『更級日記』の作者の人生と人物関係を明示し、日記の内容と読者に伝えたい仏教的な考え方を説明している。

本文は全訳で、和歌は5行書きで示されている。Rene Sieffert氏によるフランス語訳と違って、日本独自の植物や文化・人物等に関する詳細な脚注がある。巻末に翻訳に関しては、日本古典文学大系『土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・更級日記』（西下経一校注、岩波書店）、日本古典全書（玉井幸助校注、朝日新聞社）、大森安仁子氏・土居光知氏による英訳を参考にしたとある。また、1880年に遡るA. Pfizmaier氏によるドイツ語訳について訳者は次のように述べる。「残念ながら、A. Pfizmaier氏によるドイツ語訳はもう触れることができなくなったので、手に入らなかったのです。」(9)。その言葉は、Ulrich Kemper氏によるドイツ語訳が出版された年、つまり1966年に、ヨーロッパ諸言語における『更級日記』のおそらく一番古い翻訳はすでに姿が消えてしまった証拠になると思われる。

イタリアではGiorgia Valensin氏による『枕草子』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』を含む翻訳が『更級日記』の一番古いイタリア語訳である。それは前述したように『古代日本の宮廷婦人の日記』という大森安仁子氏・土居光知氏の英訳の重訳にすぎないため、日本語の本文に比べてみると誤り、また省略されたところが少なくないようだ。本文は『枕草子』の以外は全訳で、1946年、そして1981年にも再版されている。14頁ぐらいの解説では、訳者自身が平安時代の文化、特に、宮廷婦人の教育と日常的な生活について述べる。

次に、各作品の内容に関して評価する。

2　ヨーロッパで公表された研究論文

『更級日記』はたとえばイタリアでは Giorgia Valensin 氏による翻訳の解説以外には、日本文学の学習者がよく使用する日本文学史の参考文献など、平安時代の日記文学が紹介されている箇所に必ず掲載されているが、それは作品の内容の簡単なあらすじにすぎない。

長い間『更級日記』研究の問題点はあまり検討されていないイタリアでは、2002年にトリノで行われた第24回の伊日研究学会で当時、アメリカのスタンフォード大学に留学していた Roberta Strippoli 氏が「文学の罪と夢―更級日記を読む」(10) と言うテーマについて発表して『更級日記』の研究が進展したと思われる。

Strippoli 氏は、1999年に出版された Edith Sarra の Fiction of *Femininity: Literary Inventions of Gender in Japanese Court Women's Literature* という著書の影響を受けて、平安および中世の日本における「夢」について概観し、『更級日記』の作者をとりまく知的環境が、虚構文学に対していかに否定的であったかを述べる。次に、後半では『更級日記』の分析、特に、この作品における夢の機能を検討する。

その後、2005年に筆者が初めて直接日本語からイタリア語に翻訳した『更級日記』の解説では、様々な研究問題点について触れたが、あまり論じられていない旅のモチーフについて2006年に城西大学で行われた国際学会で発表した(11)。その発表を 4 節に分けて、作品におけるさまざまな立場から旅のモチーフを考察してみる。まず上総から平安京までの旅を描きながら、文化果つる草深い片田舎で生い育った作者からみて、別の世界である都は関心を募らせている物語が沢山あるというがゆえに焦がれる地だけではなく、受領段級の若い女性に貴族

の男性と結婚するためのわずかな機会を与える環境としてもどんな大事な意味を持っているのかを検討する。次に作者が物語の読書によってできる空想上の世界への旅、そして作者の内面的な旅、つまり少女時代の夢から失望の多い大人の悲しい現実にいたるまでの人生の旅を描く。最後に、現実に目覚めて無信仰の過去を悔いた作者の物詣での記、いわゆる来世への旅の準備についても考えてみる。

今年、2009年に、Utet というイタリアの主要な出版社が日本古典文学における仏教の影響について論文集を出版する予定があり、筆者も論文執筆を依頼されており、「更級日記における罪深い読書、正夢、救いの希望」というテーマを選んで、この作品の中では仏教、特に平安時代に広まった浄土宗がどんな役割を果たしているのかを考察していく。

最近、アメリカの日本古典文学の研究に影響を受けて、イタリアだけではなく、フランスでも、平安時代の女流日記文学についての研究は強く刺激されたと思われる。その研究は明らかに作品と当時の社会の関係について知識を深める方向性を示していて、一般読者にも昔、遠い国で書かれた日記の内容を分かりやすくしようとしているようだ。たとえば2006年に出版された Jacqueline Pigeot 氏(12)によるフランス語訳の『蜻蛉日記』の解説を読んでみると、さまざまな立場からこの作品の作者の人生と平安時代の文化が分析されていて、当時の時代には受領段級の女性は散文文学の発展のためにどんな大事な推進力となっていたのかを把握できると思われる。

3　『更級日記』と私

1992年から1996年まで日本に留学していた私がお茶の水女子大学の人文科学研究科の大学院に入ろうとしていた時に、入学試験を受けるために一所懸命に古語の勉強をしていて、週に一回、当時、指導教官

として大変お世話になった大塚常樹先生に『更級日記』を薦められ、少しずつその作品の魅力を味わうようになった。どうして大塚先生は古語の勉強のためにこの日記をお選びになったのかよくわからないのであるが、考えてみれば、他の古典文学の作品と比べて、文章があまり難しくないという特徴が一つの理由になるかもしれない。しかし、おそらくもう一つの大きな理由は、この作品は叙述的な箇所が多くて、読みながら、想像力を使えば、目の前で生き生きした場面が現れてきて、気がつかないうちに心を捕らえるということであろう。

修士課程を終了して、帰国してから、イタリアではまだよく知られていなかった日本古典文学の作品を研究を続けることにして、特に平安時代の物語と日記を分析しながら、平安時代の女性の社会の位置について勉強するつもりだった。すでに、申し上げたように、2002年にトリノ大学で行われた第24回の伊日研究学会に参加してから、当時、平安時代の文学作品における婚姻慣習について研究していた私はよく女流日記を参考していて、それは平安時代の代表的な作品であるのに、直接日本語からイタリア語にまだ翻訳されていないのは残念だと思って、日本に留学していた時に、古語の授業で読んだ『更級日記』を翻訳してみたいという気持ちを強く感じたのである。

翻訳をしていた時に、底本としては、平野由紀子先生に教えていただいた現代語訳と注が付された、外国人にもとても分かりやすい関根慶子氏訳注の『更級日記』（講談社学術文庫）を使用したが、『更級日記評解』（玉井幸助、有精堂）、日本古典文学全集に納められている『更級日記』（犬養廉校注、小学館）も参考にした。それ以外には、もちろん、ヨーロッパ諸言語における『更級日記』の翻訳、特に René Sieffert 氏によるフランス語訳もよく本文と比較しながら、読んでいた。それで、本文で60頁にすぎない作品の翻訳を完成するまで一年以上かかってしまったが、今、考えてみれば、その翻訳の辛い仕事は私にとっては、古語と平安時代の文化を理解するのにとても勉強になった。

イタリアでは、80年代から日本古典文学の色々な作品の翻訳を出版しているMarsilioという出版社に原稿を送る前に、何回も本文とイタリア語訳を読み直して、一般読者を対象にするように、本文の解釈、それから古語の辞書と百科事典を調べて、巻末にできるだけ分かりやすい注と用語集（固有名詞、官職等）を付けた。本文に対しては、人物関係、地名、和歌の本文とその意味の説明を書いた。それから、イタリア語訳には非常に翻訳しにくい日本独自の植物と平安時代の文化に関する名詞（楽器、服装等）はイタリア語訳にそのまま日本語で残しておいて、巻末の用語集にその説明を加えた。

翻訳していた時に、一番苦労したのは言うまでもなく、和歌の翻訳だった。5行書きで、韻文調に書こうとしたけれども、あちらこちらに散文調に近い、あるいは気がつかないうちに、完全に散文調になってしまった和歌もあるかもしれない。古語の日本語で書かれている和歌をヨーロッパの諸言語に翻訳する時に、特に掛詞の翻訳はむずかしいと思う。同時に二つの意味を持っている言葉の場合には、訳者が一つの意味を選ばなければならないので、もう一つの意味は翻訳からどうしてもなくなってしまう。そして、その場合には、もちろん訳者は注を書くことができるが、たしかにUmberto Eco氏が述べているように訳者が注を書く時、それは翻訳に失敗した証拠になるのである[13]。私も、『更級日記』の本文に対して知らず知らずのうちに注をたくさん書いたのは、やはり上手に翻訳できなかったことが多かったからかもしれない。でも、今、注を書かなければ、イタリア人の一般読者は日本古典文学の代表的な作品である『更級日記』の内容が理解できなかったのではないかとも思っている。

イタリア人の日本文学の学習者、それから一般読者にも『更級日記』をできるだけ明確に紹介するために、翻訳の解説を8節に分けて、順番に 1. 文学の作品として日記、2. 平安文学における日記の誕生とその発展、3. 名前がない女性―菅原孝標の娘、4.『更級日記』の成立

と内容、5.文学の罪と救いの願望、6.神が現れる夢、7.月の光、8.写本の歴史などを検討した。新しい研究課題としては、ヨーロッパの文学の日記と平安時代の日記と比較しながら、それはどこが違うのかを究明してみた。女流日記文学の日記は、ヨーロッパの文学の日記と違って、日記とは言っても、日次のものではなく、文字通りの日記とはなっていない。時間の経過に従った記述にはなっているが、暦年月日に形式的にこだわってはいない。長年月の記述ではあっても、何年間かの記事が欠けている場合もあれば、反対に、日次やそれに近くなっている場合もある。執筆の場が記事の場とは必ずしも近接しているとは限られず、記事の当座が過去になってからの記述だからである。女流日記の題材が身辺的で、主観的であるために、忘れてはならないことをとりあげるよりも、忘れられないことに重きがおかれたり、それが専らになったりする。ヨーロッパの文学の日記と比べて、もう一つの大きな違いは、女流日記に多く取りこまれている和歌にあると考えられる。おおまかに言えば、一種の私家集的作品になっている。殊に豊富な詞書をもった場合には、私家集と日記との区別はつけがたい。『更級日記』などには、部分的に私家集的なところもあるし、散文で書かれていることも和歌の解説に過ぎない場合が少なくないと言えるのであろう。

異文化の読者に平安時代の日記全体の構造や流れの中の必然性において配置されている和歌の機能を理解させるためには、まず、平安時代の貴族たちが生活のあらゆる場面で歌による交信を常としたということを説明しなければならない。その日常性は、今の人々の会話や、散文の手紙と同じであるかに見えるが、実は会話と散文と決して同じであるわけではない。歌はそれ自体、何よりも相手の心へ真っすぐに訴えかけるものであるから、受け手はそれに応えて、何らかの好意的反応を起こさずにはいられないので、平安時代の作品の本質を把握するためにそれは見逃せないことだと思われる。

2005年に『更級日記』のイタリア語訳が出版された時[14]、読者の反応が思ったよりよかったと思う。イタリアの新聞の記事に日本文学の代表的な作品の翻訳として報告されていて、嬉しいことに、ヴェネシィアで行われた第31回の伊日研究学会では翻訳賞もいただいた。

今、この翻訳はイタリアの大学の日本文学の講座でよく使われていて、日本文学の学習者だけではなく、一般読者にも読まれている。学生のフォラムに書いてある情報によると、イタリアでは日本古典文学の授業で紹介された作品の中で、学生に一番愛されているのは『源氏物語』だそうだ。しかし、最近、『更級日記』の新しい翻訳のおかげで、この日記について卒論を書いている学生が増えてきて、その論文を読めば読むほど、翻訳者の仕事、そして異文化の研究の価値がだんだん分かってきたような気がする。

注

（1） Edwin Cranston, “A Bridge of Dreams”, *Monumenta Nipponica*, XXVII, 4 (1972), p. 442.

（2） 伊藤鉄也編、『海外における平安文学』、（国文学研究資料館、2005年）、121、133頁。

（3） 関根慶子訳注『更級日記』（講談社、1977年）、25頁。

（4） Ivan Morris, *As I Crossed A Bridge of Dreams, Recollections of A Woman in Eleventh-Century Japan*, London, Penguin Books, 1975, p. 34.

（5） Edwin Cranston, 前掲書、446頁。

（6） 玉井幸助、「更級日記のおよび其の復旧」、（秋山虔編『平安日記』、三省堂、1960）399頁。

（7） 関根慶子、前掲書、35頁。

（8） René Sieffert, *Le journal de Sarashina*, Paris, POF, 1978, p. 31.

（9） Ulrich Kemper, *Sarashina nikki. Tagebuch einer Japanischen Hofdame aus dem Jahre 1060*, Stuttgart, Reclam, 1966, p. 86.

（10） Roberta Strippoli, “Il peccato della letteratura e il sogno. Una lettura del *Sarashina nikki*”, in *Atti del XXVI Convegno di Studi sul*

Giappone, Venezia, Cartotecnica Veneziana Editrice, 2003, pp. 457–470.

(11) Carolina Negri, "Travel in Memoirs by Heian Women's Writers: The *Sarashina nikki*", in *Travel in Japanese Representational Culture: It's Past, Present and Future. Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies*, AJLS, vol. 8 , 2007, pp. 71–80.

(12) Jacqueline Pigeot, *Mèmoires d'une éphèmere*, Paris, de Boccard, 2006.

(13) Umberto Eco, *Dire quasi la stessa cosa*, Milano, Bompiani, 2003, p. 95.

(14) Carolina Negri, *Le memorie della dama di Sarashina,* Venezia, Marsilio, 2005.

編者略歴

平野　由紀子（ひらの　ゆきこ）

お茶の水女子大学教授

主要著書

小野篁集全釈（風間書房・1988年）
平安私家集（共著・岩波書店・1994年）
後拾遺和歌集新釈 上・下（共著・笠間書院・1996年、1997年）
信明集注釈（日本古典文学会監修・貴重本刊行会・2003年）
千里集全釈（共著・風間書房・2007年）
平安和歌研究（風間書房・2008年）

論文

後撰集と伊勢物語
（山本登朗編『伊勢物語 虚構の成立』・竹林舎・2008年）
私家集研究の現在
（秋山虔編『平安文学史論考』・武蔵野書院・2009年）

平安文学新論
―国際化時代の視点から―
二〇一〇年三月三一日　初版第一刷発行

編者　平野　由紀子
発行者　風間　敬子

発行所　株式会社　風間書房
101-0051　東京都千代田区神田神保町一―三四
電話　〇三―三二九一―五七二九
FAX　〇三―三二九一―五七五七
振替　〇〇一一〇―五―一八五三

印刷　太平印刷社
製本　矢嶋製本

©2010　Yukiko Hirano

NDC分類：910.23
ISBN978-4-7599-1789-5　Printed in Japan

JCOPY〈㈳出版者著作権管理機構 委託出版物〉
本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合はそのつど事前に㈳出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail:info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。